

ブラザー・フィリップの思い出



ジャン・マルク・ラポント
1933 - 2005

ブラザー・フィリップがお世話になった友人の皆さんへ

2006年5月ロングユにて

序文にかえて

私たちの人生は長い道にほかならないのではないのでしょうか。私たちは、その長い道をたどりながら、まわりの人たちが幸せになるよう手助けをするために、自分にふさわしく自己実現することが求められています。それは、私たちと同じように、まわりの人たちも神の愛の光に浴しているからです。私は、このような考えに導かれて、かけがえのない弟、ブラザー・フィリップこと、ジャン・マルク・ラポアントの伝記を書きました。

この伝記をしたためるにあたり、どうしても個人的な思い入れが入ってしまいました。第三者の眼でフィリップのことを書くことは私には到底できません。その点お許しください。

ブラザー・モーリス・ジャック・ラポアント

幼少時代と少年時代

ジャン・マルク・ラポアント(以下、フィリップ)は、1933年10月20日、父ルイ・フィリップ・ラポアントと母マリー・ブランシュ・ラポアントの第四子として、この世に生を受けました。

フィリップの上には、姉のスザンヌ、兄のロジェ、そして、私ジャックがいました。

ちょうど世界大恐慌のころでしたので、家計は底をつき、慎ましいアパートを借りるのがやっとでした。フィリップはそこで生まれました。フィリップが育つにつれ、別のアパートに移り住みましたが、どこも同じくらいのアパートでした。



フィリップはとても可愛がられて育ちました。以前、お話ししたことがあると思いますが、いまだに「フィリップが生まれた朝、最初にフィリップとご対面したのは誰だったか」と、兄弟の間で他愛ないことを言いあっては懐かしんでいます。

オッタワの下町のノートルダム小教区にギッグ小学校というラ・サール会経営の学校があり、フィリップはそこに通いました。フィリップが伝道の道を選んだのはそのころです。この時代のフィリップのことを、フィリップの同級生で生涯の友人であるアンドレ・コルミエさんに語っていただきましょう。

1946年から1947年にかけて8年生(最高学年)のクラスの担任はテレーズ・ロベール先生でした。先生は、海や空の交通の未来について生徒たちに討論させることにしました。生徒たちは、これらのテーマについてあらかじめ調べてから作文を書き、それに先生が手を加えました。その討論会は学校の講堂で開かれましたが、親ばかりでなく一般の人も招かれました。海の交通について発表したのは、ジャン・マルク・ラポアントとオスカー・ヴェジナでした。

当時校長だったブラザー・シプリアンは、1947年の1月から最高学年の生徒たちに面接しました。面接の主な目的は、中学校はどこに行きたいのかを確認することでしたが、一部の生徒には聖職に就くことを希望しているかどうか聞きました。少なくとも4人の生徒が聖職者になることを希望したそうです。

兄ロジェと私は、オッタワのド・ラ・サール学園の建物の一角にあったラ・サール会の修練院に移り住みました。フィリップは、母親と姉スザンヌと家に残ったので、母親とはいっそう親密になりました。しかし、4年後には、彼もまた修練院への道を選ぶ決心をしたのです。母親と離れて暮らす辛さを乗り越えて。

父親は、失業した上に病魔に苛まれたので、一家の大黒柱としての役割を果たすことができませんでした。母親は、類いまれな強さと寛容さを持ち合わせた女性でした。戦後に公職につく希望を持ちながら、あちこちの家の床掃除をして家計を支えたのです。まだ幼かったころ、配給所のスープの列に並ばざるを得なかったことを思い出すと、今でも辛いです。

母親は、若いころケベックで教師をしていたこともあり、子どもたちに読書の楽しさを教え、学業に専念するようしつけました。学校の成績がいいのは、わが家ではごく当たり前のことでした。ブラザー・大友は、フィリップの長年の知り合いですが、わが家のことについて次の通り話してくださいました。

仕事に行く途中、ブラザー・フィリップのお母さんはよく図書館に立ち寄り、自分と子どもたちが読む本を借り出していました。子どもたちはそろって本の虫でした。この読書の習慣は、ブラザー・フィリップの晩年まで続きました。読書への情熱は、お母さんから授かった宝物だったようです。

ブラザー・フィリップがお母さんから授かったもう一つの宝物は祈りへの熱意でしょう。私たちの修道院では、ブラザー・フィリップが必ず朝一番にお祈りを始め、長い間瞑想に耽っていました。

しかし、フィリップの運命が定まるのはこれから後のことです。

修練院にいた時期は、フィリップの思春期、人格の形成期にあたります。このころについてのエピソードを、フィリップの当時の2人の同僚に語っていただきました。先にご紹介したアンドレ・コルミエさんは次のように証言しています。



ジャン・マルク・ラポアントは、1947年の復活祭の月曜日、修練院に入りました。オスカー・ヴェジナと私が入った数週間後です。その数ヶ月後、ブラザー・モリス・ジャックは修練院長となりましたが、すぐにジャン・マルクの優れた才能に気がつきました。まず言えることは、彼が同僚の修練生から絶大な信頼と尊敬を集めていたことです。オッタワの修練生は、ラ・サール11期という班を組んでいました。ジャン・マルクは少なくとも2年にわたって班長を務め、強いリーダーシップを

発揮していました。

夏の休暇の間、修練生たちは1ヶ月半ほどカルメのルージュ川沿いのキャンプ場で過ごしました。ジャン・マルクは、学識でも精神面でも飛び抜けていただけでなく、芸術的な才能にも恵まれていました。彼は、後にこの才能を伸ばし、名カメラマンになりました。長距離のハイキングに出かけた際、彼はポアント・オ・シェーヌ教会の近くの小さな公園で最初の油絵を描きました。その油絵には、美しい樹のそばの大きな岩の上に乗っているリュックサックが描かれていました。とても素朴な絵でしたが、彼がそのころからすでに芸術家の眼で事物を観察していることがよくわかりました。

続いて、もう一人の同僚、ブラザー・マルセル・シャレットは、悪戯が好きで陽気だった当時のフィリップについて、次のように語っています。



彼は生真面目であると同時に冗談が大好きでした。食堂で、彼の上役が「テーブルに置きなさい」の意味で（原語を直訳すると）「お盆を地面に置きなさい」と言ったところ、「はい、おっしゃる通りにいたします」と言いながら、お盆を床に置いたことがありました。

こんな一面もありましたが、任務となると真面目に完璧にこなし、中途半端なことはしませんでした。伝道に生涯を捧げた彼には、天国の門番、聖ペトロがきっと天国への扉を大きく開いたことでしょう。それは彼の夢でした。

さようなら、ジャン・マルク。僕ももうすぐそちらに行くからね。

ラ・サール会への入会および入会後の数年間

修練院の生活が終了すると、フィリップはラヴァル・デ・ラピッドにあったキリスト教学校修士会(ラ・サール会)の修練所に移りました。

修士名は、両親の名前をもらって、ブラザー・フィリップ・オヴ・メアリーとしました。その後、トロント修士会の神学校に進み、大学進学への準備をすませました。それからオッタワに戻り、オッタワ大学に進みました。ちょうどラ・サール会が、キング・エドワード通りの460番地にあった宿舎を購入し、リフォームを終えたばかりでした。フィリップは同級生とともにそこに入居したのです。

1953年、フィリップは修道士としての最初の仕事にとりかかります。

オッタワの東100kmのホークスベリーにあるクリスト・ロウ小学校で教鞭をとりました。1年後、オッタワのサント・アンヌ小教区内でラ・サール会が経営していたブレブフ小学校の教師に任命されました。当時の教え子には、フィリップと生涯の親交を結んだ人たちが多数いました。

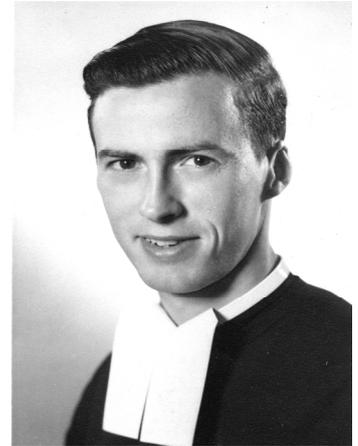
修練生活を終えるころ、フィリップは伝道の仕事を志願していました。

1958年に修道会から日本に赴任するよう依頼されました。それは家族にとって、とくに母親にとってショックでしたが、母親はこの試練を寛容な心で受け入れ、末っ子のフィリップを送り出したのです。

日本において

最初の数年間

終生誓願を立てた2週間後の1958年9月11日、フィリップは「日出ずる国」日本に赴任しました。フィリップはそれから47年間、日本に滞在することになります。それは実り多い歳月でした。（訳注：この「日出ずる国」という言い方は、聖徳太子が隋に送った手紙「日いづる処...」に由来すると思われませんが、仏語では日本を指す言葉として時々使われます）



日本に着いてまもなくフィリップは鹿児島県のラ・サール学園に赴任し、そこで数ヶ月間英会話を教えました。その後東京に移り、2年間日本語の勉強に専念しました。フィリップの日本語を学ぶ姿勢は真剣そのもので、習ったことはすぐ実際に用いて練習しました。その甲斐あって、日本語の間違いで日本人に笑われることはなくなりました。こうして腰を据えて勉強したおかげで日本語が堪能になり、流暢に話せるようになったのです。

フィリップは鹿児島に戻り、英語、倫理と宗教の授業を受け持ちました。その7年間で、フィリップは自分の性格にあった教育法をみだしていきました。フィリップは、博学で生徒をびっくりさせたり、概念や法則をみごとに説明したりするよりはむしろ、教育者および指導者として生徒一人ひとりの長所を見いだして、それを伸ばしていくことに長けていました。この点について、フィリップの訃報を聞いた当時の教え子が語っています。

ブラザー・フィリップは、私にとって最高の先生であり、40年間友人としてご交誼を結んで下さいました。鹿児島にいらっしゃったころは、先生はまだ30歳になっていなかったですね。最初、英語と倫理を中学校で教わりました。それから先生のお勧めで聖書を読みはじめ、先生とは色々なことについてお話ししました。（安楽 国弘）

ブラザー・フィリップ、先生が温かくほほえんでくださったこと、学校生活や社会生活について前向きに考えるようご指導くださったことに感謝しています。

（薄木 三生 and 由利子）

ブラザー・フィリップとは生涯忘れられない思い出がたくさんあります。鹿児島県のラ・サール高校で受けた先生の英語の授業はユニークでほんとうに楽しかった。（吉見 信）

ブラザー・フィリップのご訃報をお聞きし、心からお悔やみを申し上げます。今日の私があるのは先生のおかげです。東京ラ・サール寮の時代、まだほんとに若かった私に、先生はありとあらゆることについてご指導くださいました。（遠田 公夫）

先生に英語を教えていただいてからもう40年たちます。でも、先生が素晴らしい教師であったこと、授業に真剣に取り組んでおられたこと、それから生徒にとっても優しく接して下さったことを今でもよく覚えています。(山元 正博)

フィリップは定期的にカナダに戻りました。最初は5年間の勤務の後の休暇で。それから、1968年から1969年にかけてと、1969年から1970年にかけて、ケベックで教理の研修を受けた後、ローマで第二修練を受けたときに帰国しました。最初の帰国は1963年でした。それは、特に心を動かされ、悲しみに満ちた帰国でした。よくある、でも不運な車の事故で、1962年に母親が他界しましたが、突然のことであり、また、当時の交通事情や慣習のため、葬儀に間に合うように帰国することはできなかったのです。フィリップは、この上ない悲しみにうちひしがれ、孤独感に苦しみました。フィリップの最初の帰国は、母親のお墓と亡くなった場所への巡礼の旅となりました。私はフィリップの優しい心に胸が熱くなりました。

責任ある仕事

1972年、フィリップは、同僚のブラザーたちの勧めで、モンリオール地区の副監察員に任命されました。これは日本に居ながらにして、同地区の責任を負うという役割でした。フィリップは、3年の任期を二期務めました。第一期と第二期の区切りとして、1976年に帰国し、教会参事会に発言権を持つ会員として出席しました。フィリップと私は、このとき何度も意見を交わしました。この任務のさまざまな局面についてや、日本におけるラ・サール会の伝道の未来についても話しあいました。外国人経営の学校は立派な名声を誇っている。それらの学校と比べて、設備は申し分ないが外見がハイカラでない。それは望ましいことだろうか。というようなことについても議論しました。フィリップは、日々の経営問題の処理に忙殺されずに、より広い視点と長期的観点から経営判断を下すよう努めました。

この任務を終えた後、日本管区の会計係と日野の修道院長に任じられました。フィリップは、これらの任務を申し分なく務めたものの、もともと管理職には不向きでした。そこで、自分らしいやりかたを醸成していきました。フィリップは、管理職としてふるまうことはせず、人と人とのふれあいを大事にしました。ここで、ブラザー・大友に当時のことを語っていただきましょう。

ブラザー・フィリップの伝道に対する考え方が大きく進展したのはこの時期です。日野の修道院は、東京の西にある多摩ブロックの小教区に属していました。ブラザー・フィリップは、伝道へのエネルギーをこの地域に注ぎました。ほぼ同じころ、彼は修道院の隣にあった学生寮を閉鎖して、その建物を地域の神父さんたちに開放し、黙想会や集会に利用してもらおうと考えていました。このプロジェクトはうまくいきました。まもなく黙想会や集会のためにもっと広い施設が必要になったので、ブラザー・フィリップは建物を増築し、コンサートにも使えるような小ホールまで作りました。

私が以前、日本を訪れたとき、日野の修道院で多摩の神父さんたちにお会いしました。神父さんたちは、協力して次の日曜日の説教に使う資料を準備していました。そこには、フィリップも加わっていました。神父さんたちは、修道院の施設を利用しながら、ブラザーたちと親しくし、協力しあっていました。東京大司教も日野を訪れ、静養したことがあ

ります。このような 人と人とのふれあいは、外部の人には なかなか分かっていただけないと思いますが、信者の小人数の共同体にとってはとても大きな意味があるのです。

指導者と友人

日本管区ラ・サール会では、日野から車で3時間の、長野県茅野市御狩野(みかりの)に研修所を持っていました。でも、ブラザーたちはあまり足を運んでいませんでした。鹿児島や函館の修道院からは遠すぎました。日野のブラザーたちもほとんどが行きたいとは思っていませんでした。フィリップは、この研修所を念入りにメンテナンスし、自らの設計による増築を行い、卒業生とその家族、そして多摩教区のグループが利用できる宿泊施設(ラ・サール・ロッジ)にしていきました。

フィリップが、人の話に耳を傾け、喜びや悲しみを分かちあうという、人と人とのふれあい方を育てていったのは日野、そしてとくに御狩野でした。御狩野では、ハイキング、一緒に夕食をとりながら交わす会話、打ち明け話、写真や思い出話の交換等を通して親交を深めていきました。フィリップが自己実現を遂げ、自分の性格にあった(伝道の)道を発見したのは、日本におけるこの後半の時期でした。このような 人と人とのふれあいによって多くの人たちと固い友情が育まれました。



私は以前からフィリップがたくさんの人たちと固い友情で結ばれていることを知ってはいましたが、今回の不幸に接し、フィリップが人々と結んだ友情の強さと誠実さをあらためて実感し、ほんとうに驚きました。

私にとって、ブラザー・フィリップはこれまで会ったことのある人たちで最も心の優しい人のひとりです。先生はいつも新しいことにチャレンジしていました。音楽やスポーツを愛し、山にハイキングに行くことや、きれいな写真を撮ることもお好きでした。撮った写真をよく送ってくださる親切なお方でした。先生が得意だったことはたくさんありますが、人とすぐ友達になる能力が一番すばらしかったです。私は先生からいただいたお手紙を読むのがとても好きでした。先生が下さったお手紙には愛情がこもっており、また思慮深く書かれていて、印象深いものばかりでした。先生が私たちからどんなに慕われていたか、私たちすべてにとって、先生を失うことがどんなに辛いことか分かっていただけたらと存じます。(角田 香菜枝)

私と家族はブラザー・フィリップ・ラポアントのご訃報をお聞きし、深い悲しみに沈んでおります。ブラザー・フィリップは、生涯忘れることのできない思い出をたくさん下さいました。卒業した後、家族でラ・サール・ロッジに行くことが楽しみでした。それはユニークな施設で、たくさんの人たちの心をつかんでいました。そこに行くと、心が安らぎ、忙しい日常を忘れることができました。ブラザー・フィリップには、自然と調和して生きるにはどうしたらよいか、人々と理解し合うにはどうしたらよいかを教えていただきました。(吉見 信)

フィリップ先生は大好きです。ほんとうに素晴らしいお方でした。先生の知恵と親切は私にとってとても大きな意味がありました。(只野 真由美)

ブラザー・フィリップには東京のラ・サール・ハウスで 1977 年に最初にお会いしました。一緒に山登りに行ったり、徹夜で話し込むこともありました。とても親切で寛容だった先生は私に大きな影響を与えました。(斎藤 泰晴)

ジャン・マルクは私にとって親友であるばかりでなく、志操堅固と誠実のお手本でした。なすべき仕事は彼にとって神聖な意味をもっており、その達成のためには全身全霊を捧げました。それが勉強であれ、授業であれ、どんな任務でも同じでした。趣味にも彼は真剣に取り組みました。写真には芸術家としての魂を込めました。(Andre Jean Cormier)

仙台における最後の数年

1995 年、フィリップは、東京から函館へ赴任することになりました。短い間でも校長として学校の指揮をとって欲しいという要望からでした。フィリップは、学校の現場から 25 年も遠ざかっていたので、この任務は気が重かったようですが、同僚のブラザーに代わって授業を担当しました。そのブラザーは東京に戻って日本語を勉強したあと、ローマの国際ラ・サール・センターに赴任したのです。

1997 年、フィリップは、仙台に赴き、修道院長に就任しました。フィリップは仙台で 8 年間過ごしました。赴任してまず、修道院の建物で長年の歳月で傷んでいた部分の改修に精力を注ぎました。それから、女子修道会が経営していた幼稚園の園児たちと小学校低学年の生徒に英語を教えました。そればかりでなく、地域の信者たちに聖書の講義を授けました。そして、仙台の溝辺司教の依頼で信者の青年たちの黙想会に参加し、会を活気づけました。この青年たちの一人は 2005 年の春、カナダにフィリップを訪ねてきました。仙台の納骨式に参列した青年も数人いました。

帰 国

日本におけるブラザーの数の減少、年々傷みが進行していた校舎の建て直しの必要性、および財政事情から、ラ・サール会は、日野修道院と御狩野ロッジを売却して、日本管区を鹿児島と仙台と函館の 3 ヶ所に再編成することを決定しました。フィリップは年齢的に、もう授業を担当することはできないと感じており、張り裂ける思いに苦しみました。自分が学校以外で教え子や信者たちとふれあうために築いてきた建物が失われようとしていましたが、このふれあいは、個人的な活動であり、ラ・サール会をあげての活動ではないことは明らかでした。また、フィリップは、誠実で深く、しかも熱い友情をもってみなさんとエンジョイするだけでなく、伝道の面でも創造性を発揮して役に立ちたい、と考えていました。

このころは、フィリップにとって苦難の日々でした。日本は彼の母国(ふるさと)になっていたのです。家族はそれぞれ「フィリップもそろそろカナダに戻る時期ではないだろうか」と思っていました。まだ元気で健康なうちに帰国すれば、カナダの生活にも慣れるこ

とができるからです。しかし、訊いたり、促すことはできても、誰もフィリップに帰国するよう「指示」することはできませんでした。フィリップは一所懸命に祈り、熟慮し、まわりと相談し、ついにカナダに帰る決心をたてました。今帰れば、まだ元気だから、カナダで人の役に立つことができると考えたからです。姉スザンヌは、夫に先立たれて助けを必要としていたし、兄ロジェの健康も心配でした。

2005年4月10日、フィリップはオッタワに帰ってきました。最初の数ヶ月、新しい環境に順応するためにじっとしてはいませんでした。フィリップは、姉の別荘のメンテナンスのために時間を割き、甥たちや姪たちと接し、兄ロジェに手を貸しました。ヴァカンス・ファミリーというベルナル湖の畔にある施設に興味を示し、積極的に出向きました。昔から誠実に親交を育んでいた友人たちと再会し、ふだんの生活上の相談ごとを聞いたり、自然のなかを一緒に自転車で走ったり、散歩したり、思い出話に花を咲かせたりして、友情を確認しました。

2005年9月、フィリップは、霊性と神学の課程を履修するために、オッタワのサン・ポール大学の一般の学生として登録しました。彼の計画では、友人のレアルと2006年の春にコンポステル巡礼(スペイン)に行くはずでした。フィリップとレアルは、この巡礼の旅に備えて体を鍛えたり、書物を調べたり、分からないことは巡礼を経験した人たちに質問したりしていました。

逝去と葬儀

2005年12月20日、フィリップが滞在していた修道院では、職員とその家族を招待してクリスマスを祝いました。フィリップは、陽気に記念写真を何枚も撮っていました。翌日の朝、フィリップは起きてからいつものように朝の散歩をしました。昼食後、フィリップは、買ったばかりのクロスカントリー用のスキーを下ろして新雪の上を滑ろうと、近くの公園へ出かけました。フィリップがなかなか帰ってこないのに、だんだん心配が募ってきましたが、公園よりも遠くに出かけたのかも知れない、と考えていました。

17時30分に警官が修道院を訪ねてきて、フィリップが危篤状態で蘇生のための部屋に収容されていること、心臓発作に襲われて蘇生が困難であることを伝えました。警官は、この時すでに、蘇生が成功しなかったことを知っていたようです。検死官が、解剖の結果、発作は急性であり蘇生はもともと無理であったこと、それから前々から心臓発作の徴候があったわけではないことが分かったと話してくれました。こんなに突然 死が襲ってくるとは信じられませんでした。コレステロールの塊が血管の壁から脱離して心臓の入り口を塞いだのでしょうか。本当のところ、何が起こったのか誰も分からないのです。

この前触れのない突然の死に、家族も、修道院も、カナダと日本の友人たちも衝撃を受けました。フィリップをこの上なく慕っていた人たちに、どう伝えればいいのか。みんな、フィリップと会って一緒に時間を過ごしたい、友好を深めたい、一緒に行動したい、これから何年も家族として友人として愛情に満ちた日々を過ごしたい、と期待していました。それから、こらえきれない涙が流れ、抱きあって慰めあう日々が続きました。多くの弔問や電話、それに、お手伝いの申し出もいただきました。涙をこらえながら、親戚やカナダと日本の友人たちをお呼びして葬儀を執り行わなければなりません。

友人たちがたくさん訪ねてきてくれました。こんなとき、ほんとうの友情だけが心の支えになります。敬意を表しながらただ黙っているだけでも、互いに相手の悲しみを察しあうだけでも慰められました。

こちらには、フィリップを知る人はまだ多くなかったのにもかかわらず、ラ・サール会のブラザーたちがすぐさま友情と弔意のメッセージを送ってくださり、自ら出向いてくださる方もいました。日本からは電子メールがたくさん、たくさん届きました。そこには、衝撃を受けた、日本を発ったころは元気だったので、まだ信じられない、もっと事情を教えてください、というようなことが書かれていました。みなさんにとって、今回のできごとは、かけがえのない長年の友人の損失でした。

クリスマスが過ぎた 12 月 28 日、家族の意志に沿って、遺体を公開安置し、祈りを捧げ、参列者と家族が慰めの言葉を交わしました。ラ・サール会日本管区代表として、ブラザー・アンドレ・ラベルが駆けつけ、参列していただきました。カルガリー在住の日本人の友人は、仕事の予定をキャンセルして、われわれ家族とオッタワに数日滞在し、葬儀に参列しました。デトロイトとウィンザーのいとこたちは車で駆けつけました。レアルと奥さんのスザンヌと子どもたちは、フィリップのパソコンに入っていた写真をもとに一連のスライドを作り、そして、参列者のために、フィリップの写真が入った菜とパンフレットを印刷しました。



年が明けた 2006 年 1 月 6 日、キング・エドワード通りの修道院のお御堂で、フィリップの遺骨が祭壇の前に置かれ、通夜が執り行われました。通夜には、カナダ在住の親戚に、デトロイトからの親戚も加わり、鹿児島からはわざわざ 24 時間以上もかけて卒業生(窪田 雅信さん)が来ていただきました。遺骨は 3 つの骨壺に分けられ、そのうちの 2 つは、2 月末に日本へ届けました。私たち家族の希望で、通夜には、沈黙と瞑想、それから祈りの時間が設けられました。

1 月 7 日、オッタワのサント・アンヌ教会には、瞑想の雰囲気の中、大勢の参列者が集まりました。モンリオールとケベックのラ・サール会のブラザーたち、家族と友人たちが参列しました。フィリップの兄ロジェとその妻ジャニーヌが属しているエルメールのサン・メダール小教区の聖歌隊が聖歌を歌いました。窪田雅信さんが、日本の友人と卒業生

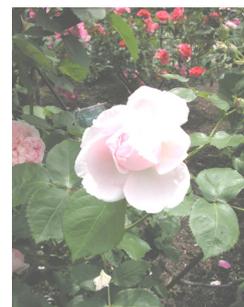
を代表し、英語で追悼の辞を述べてくださいました。カナダでは、故人のライフ・スタイルを象徴する遺品(例えば、故人が料理人の場合、コック帽など)が葬儀の場で披露されます。フィリップの遺品として披露されたのは、山歩き用の杖、植木の手入れに用いる刈り込みバサミ、日本の友人たちから寄せられたたくさんの電子メール、それから霊的なメッセージを記した手帳でした。これらの遺品は、フィリップの人生のスケールの大きさを表しています。

フィリップの特徴のまとめ

自然への愛

フィリップは自然のなかを歩くのが好きでした。日本やカナダの山のハイキング、あるいは、公園の散歩の途中でよく立ちどまり、景色を眺めたり、写真を何枚も撮ったものです。

フィリップは、それらの写真を使ってクリスマス・カードなど時候の挨拶状や栞を作りました。その挨拶状や栞には、聖書の詩編の一節を好んで引用していました。フィリップが作成したクリスマス・カード、誕生日を祝うカード、礼状などは、ほんとうにちょっとした芸術作品でした。相手の好みに合わせて特別に作ったものもありました。



友 情

フィリップのもう一つの特徴は、カナダや日本で多くの人たちと育んだ誠実で強い友情です。フィリップの友情は、魂と魂、心と心を結びつける深いもので、ありきたりの表面的なものに終わることはまずありませんでした。フィリップは、このような友情を、家族とも友人とも自然に交わすことができました。電子メールや手紙を使って、まめに連絡をとっており、手帳や住所録には、だれそのの大事な人、たとえば、母親や子どもの誕生日や記念すべきできごとまでが細かく書き込まれていました。すでに日本からフィリップを訪ねてきた友人たちもいます。友人たちは彼の死をどんなに悲しんだことでしょうか。お悔やみのメッセージを読んで、彼らの悲しみの深さが察するにあまりあることを知ったとき、涙がこぼれました。

内 面

カナダに一時戻ったとき、それから昨年帰国してから、フィリップが、朝の瞑想のあとに、考えついたことや、福音書や詩編の一節、あるいは心からの叫びの言葉を手帳に記していることに気がつきました。フィリップは、記したことを自分の一日の心の糧にしたり、誰かと共有するのです。彼の部屋には、言葉の宝石箱のような手帳が何冊もありました。

日出ずる国への帰国

フィリップは最盛期のほとんどを日本で過ごしましたので、遺骨の一部が日本の地に眠るのは自然の成り行きでした。

2月27日、フィリップの友人であるリアルとスザンヌと私は日本に旅立ちました。リアルとスザンヌは、この旅がフィリップの霊に捧げる旅であること、同僚の日本のブラザーたちや友人たちの誠実で長年続いた友情への感謝と巡礼の旅であることをよく理解していました。ですから、二人は、この旅の間、私の心の支えとなりたいと、同行を決意してく

ださったのです。私たちは小さい骨壺を2つ持参しました。一つは、仙台のラ・サール会の墓所、もう一つは、東京の郊外にあるラ・サール会の墓所に納めることにしました。

最初の納骨の儀は、仙台のカトリック霊園で執り行われました。

ラ・サール会のブラザーたちの墓所は、信仰の場にふさわしい雰囲気満ちていました。

納骨の儀は、日本管区長であるブラザー・ホルヘが準備してくださり、エメ神父の司祭のもと、祈りの雰囲気の中で執り行われました。祝福された骨壺が敷石の下に納められたあと、参列者が一人ひとり線香台にお線香をあげて祈りを捧げました。通り



すがりのお寺の僧侶もわざわざ立ち寄って、お線香をあげてくださいました。そのしぐさには、信心深さがあふれており、見ず知らずの僧侶が心をこめてお祈りしてくださったことがとても印象的でした。家族とカナダのブラザーたちと友人たちを代表して、私が追悼の辞を述べ、ブラザー・ホルヘが順次日本語に訳してくださいました。その後の食事会では、フィリップが仙台地区の司教の依頼で内容を深めるために尽力した黙想会のメンバーである青年たちに会いました。午後3時には別の集会が開かれ、修道院関係の友人たちがフィリップを偲ぶために集まってくださいました。

フィリップの鹿児島の教え子たちや友人たちが多く集まる東京では、3月11日(土)、四谷のカトリック 幼きイエス会修道院で、追悼ミサと偲ぶ会が催されました。この修道会はバレ神父が創立したものです。小さなお御堂は、200人以上の参列者でいっぱいになりました。ミサでは美しい聖歌が歌われ、信仰の雰囲気の中で進められました。ミサのあとに私が英語で挨拶を述べました。その後、献花が行われ、参列者一人ひとりがフィリップの骨壺の前に1本



の花を供え、沈黙し、祈りを捧げました。一人ひとりがフィリップへの感謝の気持ちと冥福の願いを象徴的に表す儀式で、献花台はとてもきれいな花でいっぱいになりました。慌ただしくありきたりの葬儀が多いカナダの葬儀とついつい比べてしまいました。

偲ぶ会のあと、フィリップと特に親しかった友人たちが夕食会を開いてくださいました。みなさんから、フィリップがブラザーになった動機や亡くなった時の状況、フィリップの生涯に起こったいろいろなできごと等について聞かれ、それぞれお答えしました。その夜の最後は、卒業生が多く集まるというラ・サール・クラブ(新橋)でのパーティに招かれました。函館ラ・サールの同窓会長・齊藤裕志さんは、フィリップとは面識がないのに、ラ・サール会の一人のブラザーに敬意を表するため、わざわざ日本の北端からきてくださいました。このパーティでは、日本で長年働いたブラザーたちについてたくさんの話があ

りました。ラ・サールの卒業生がかつての恩師へ示す感謝と好意の誠実さには、ほんとうに感激しました。

日本における最後の行事は、フィリップのもう1つの骨壺を、フィリップが長年住んでいた日野の近くにある五日市霊園に納めることでした。フィリップの骨壺は、ブラザー・アルマン・ドギールとブラザー・アンドレ・ジャンドンの骨壺の隣に安置されました。

この納骨の儀を最後に、今回の旅の行事は無事すべて終了しました。この旅は、スザンヌ、リアルと私が喪に服するためのものでした。それと同時に、日本のブラザーたちや友人たちにとっても、人生の悲しいページをめくるひとつの機会になったと思います。



今回の旅で印象的だったことが二つあります。日本の人たちからフィリップに寄せられた強い特別な好意、それから、日本の人たちから日本のブラザー全員に寄せられている好意です。

あと書き

私たちは、この世で人生の道をたどりながら、一人ひとり、足跡を残します。それは、私たちがどのような人間であったか、どのような行為をなしたかについての記録です。私たちは生きている間、いろいろな場所で、いろいろな時に花を咲かせます。私たちの行為や言葉の一つひとつをとってみると、一見、互いになんの連関もありません。しかし、個人の死などをきっかけにして人生全体を眺めてみると、それらの行為や言葉によって果たす、私たちのこの世における使命が見えてきます。それは、私たち自身のためとまわりの人たちのために生きるよう、神から与えられた使命です。私たちが使命として果たしたことは、この世界を豊かに潤すとともに、天国への入場券ともなるのです。

この伝記では、ジャン・マルク・ラポアントとして生を受けたフィリップがこの世で果たした使命と、彼がたどってきた道のりをふり返りました。

この伝記を読んで、みなさんの心の糧にしていただければ幸いです。

神に感謝。